

はしがき

本報告書は、神戸大学大学院国際文化学研究科附属「異文化研究交流センター (Intercultural Research Center, 通称 IReC【アイレック】)」の平成 20 年度研究部プロジェクト「多言語・多民族共存と文化的多様性の維持に関する国際的・歴史的比較研究」の活動をもとに編集したものである。

このプロジェクトの概要は、以下の通りである。

- (1) プロジェクト名：多言語・多民族共存と文化的多様性の維持に関する国際的・歴史的比較研究
- (2) 代表者：石川 達夫 (地域文化論講座)
- (3) 分担者：三浦 伸夫 (異文化コミュニケーション論講座)
岩本 和子 (現代文化論講座)
坂井 一成 (異文化コミュニケーション論講座)
中村 覚 (異文化コミュニケーション論講座)
寺尾 智史 (地域文化論講座)

(4) プロジェクトの目的

資本、企業、人間、物、文化がグローバルに移動・越境し、多国籍のないし無国籍的な活動と文化接触が増大する今日、一方では英語のような大言語の寡占化と文化的画一化が進み、マイノリティや地域の言語・文化が衰退して言語・文化の消滅が世界的な問題となり、他方では自分たちの独自性を排他的に主張する排外主義的なナショナリズムの勃興も世界的な問題となっている。

そのような今日の状況を踏まえて、本研究は、一つには旧ハプスブルク帝国のような多民族国家が辿った歴史を今日の観点から再検討することにより、もう一つにはヨーロッパや中東など多民族・多文化が共存する地域における今日の状況を分析・検討することにより、歴史を踏まえつつ今日のアクチュアルな状況を見つめて、特に多言語・多民族共存と文化的多様性の維持がいかなる条件と手段によって可能かを考究することを目的とする。

(5) プロジェクトの必要性

冷戦終結後、強力なイデオロギーの縛りが解けた結果、旧ソ連・東欧に見られたように、過去の歴史のしがらみや経済格差を背景として、それまで水面下に潜んでいた宗教や文化などの対立が浮上し、かつての共産主義のイデオロギーに代わって排外主義的なナショナリズムが力を持つようになり、それを規制するものがないまま深刻な問題が生じてきた。また、グローバリゼーションの進展などと共に、多国籍というよりも無国籍に近づいてき

た資本や企業などの活動が活発化し、経済的・社会的上昇を求める移民・移住者も増大するなど、様々なレベルでの越境が進展してきたが、それもまた、経済格差の拡大、文化摩擦、排外主義的なナショナリズムの伸長などの問題を引き起こしてきた。言語の多様性はそれだけで行政や経済などの効率化・合理化の阻害要因となりかねず、また民族と文化の多様性は個人から集団までの様々なレベルにおける軋轢を引きおこしかねない。しかしながら、効率化・合理化や画一化を過度に追求することは経済格差を拡大させ、それが文化や宗教の対立をさらに深めさせることにもなる。実際に世界の各地で、テロという最も先鋭な形から、異民族や外国人に対する差別・攻撃まで、様々な軋轢が起きている。共産主義・社会主義の衰退および資本主義的グローバリゼーションの進展と新たなナショナリズムの台頭は表裏一体をなす現象であり、マイノリティや地域の言語・文化の衰退とナショナリズム的な自己主張も表裏一体をなす現象であろう。

このような今日の状況のもとで、実は多言語・多民族共存と文化的多様性をこそ常態としてきた人類の過去の歴史を再検討し、また今日の世界の様々な地域で多言語・多民族共存と文化的多様性がいかなる問題を引き起こし、その解決のためにいかなる方策が採られているかを検討することにより、いかにして人々と民族が平和的に共存し、人類の言語と文化の多様性を維持することができるかを明らかにすることが必要である。

(6) プロジェクトの活動計画

本研究は、一つには旧ハプスブルク帝国のような多民族国家が辿った歴史を今日的観点から再検討し、もう一つにはヨーロッパや中東など多民族・多文化が共存する地域の今日の状況を分析・検討し、それらを比較することによって、特に多言語・多民族共存と文化的多様性の維持がいかなる条件と手段によって可能かについて、具体的な諸事例に基づいた一般的な知見を導きだそうとする。そのために、まず各メンバーが以下の研究活動を進める。

1. 多言語・多民族共存と文化的多様性の維持のために、歴史的に多民族国家や多民族共存地域がいかなる方策を講じてきたのか、または講じてこなかったのか、そしてそれがいかなる結果を引きおこしたのかを、複数の地域を比較しつつ再検討する。

2. 多民族・多文化が共存する地域のアクチュアルな状況と問題を、複数の地域を比較しつつ明らかにし、多言語・多民族共存と文化的多様性の維持のために何が必要かについて、個別的な事例からより一般的な知見を導き出す。

さらに、1～2について、外部から研究者を招いて研究会・講演会・シンポジウムなどを開催する。

そして、最終的なまとめとして、各研究員の研究成果と、研究会・講演会・シンポジウムなどの成果を、研究報告書として公刊し、同時に異文化研究交流センターのホームページ上で公開する。本プロジェクト自体は単年度だが、次年度以降も活動を継続・発展させていきたい。

2008年度に本プロジェクト主催で行った講演会およびセミナーは、以下の通りである。

1. 講演会：2008年10月3日（金）

「ヨーロッパにおける多文化共生——イスラーム教徒移民の社会統合」

講師：内藤正典（一橋大学大学院社会学研究科教授）

2. 講演会：2008年11月25日（火）

「グローバリズムと多民族・多文化社会——中国の現実、世界の課題」

講演1：「チベット社会：歴史と現状」シヨニマ（Xirao Nima）

講演2：「中国の民族自治政策とモンゴル族」郝時遠（Hao Shiyuan）

講演3：「中国のイスラーム民族の歴史と現状」楊聖敏（Yang Shengmin）

3. セミナー：2009年3月2日（月）

「言語多様性の消滅と保存」

報告1：「ドイツ語圏の中のスラヴ少数言語

——ラウジッツのソルブ語とブルゲンラントのクロアチア語」

三谷恵子（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

報告2：「スペイン・ポルトガルにおける少数言語保全

——言語多様性保全のジレンマとその超克」

寺尾智史（神戸大学大学院国際文化学研究科助教）

本プロジェクトが扱ったテーマは非常に大きなものであるし、それに見合った時間的・予算的余裕がなかったため、今年度の研究活動は十分なものとは言えないかもしれないが、幸いにして講演会とセミナーには学内外から多くの参加者を集めることができた。特に学生・院生の参加が多く、講師との懇親会も含め、学生・院生には貴重な勉強の機会を提供することができたと確信する。

とりあえず、以下に、今年度のプロジェクトの活動と成果を公刊する。今年度の研究活動をもとに、今後さらに研究を発展させていきたい。

石川 達夫（神戸大学大学院国際文化学研究科教授・
異文化研究交流センター研究部長）